

生活クラブ的 “ダッシュ村” を作ろう！

～ いのちに出会う場 自分と暮らしを豊かにする ～

もくじ

- 1、 はじめに
- 2、 三富新協同村 全体構想図
- 3、 協同村の歴史
- 4、 三富地域で行う意味
- 5、 あそび仕事とは
- 6、 こんなことしてみたい！
- 7、 「生産する消費者」のバージョンアップ！
- 8、 スケジュール（構想の進め方）
- 9、 終わりに

1、はじめに

『ザ!鉄腕!DASH!!』(日本テレビ)で人気のDASH村は、TOKIOの5人が地元の人達の協力を得ながら、民家の再生や農作物の栽培、動物の飼育などに励む企画です。福島第一原発の事故でやむなく中断してしまったDASH村ですが、若いメンバーたちが作業をする中で見せる生き生きとした表情や、農業や昔ながら生活の知恵を教えてください方との世代を越えた交流がとても印象的な人気企画でした。

こんな風に**誰もが生き生きと輝ける場 生活クラブ的“ダッシュ村”(新協同村)**を埼玉に作ります。

埼玉県南西部の4市1町(川越市・所沢市・狭山市・ふじみ野市・三芳町)にまたがる三富地域があり、その中の**三富新田**が世界農業遺産の候補となるなど、平地林(ヤマ)の恵み(落ち葉堆肥等)を畑に施し作物を作る**320年以上続く循環型農業**がおこなわれています。

生活クラブは、三富地域のダイオキシン汚染問題がクローズアップされた1998年以降、地元農家の方たちと共に、保全活動にかかわり続けてきました。

そこで私たちが学んできたことは、**都市近郊農業の持つ多面的価値**です。自然環境・生物多様性・景観の保全、防災機能、文化伝承等の精神的な価値など、農産物の生産以外にも農業には多様な社会的側面があります。

しかし、後継者問題や相続などで平地林(ヤマ)を手放さなくてはならないなど、農業継続の危機にさらされている姿があります。また、自然や「農」への都市住民の憧れとは裏腹に生産と消費が乖離している現実があります。

そこで、私たちは「生産者と消費者のかかわり方を変えたい」と考えました。

「遊び仕事」=農業と遊びを結ぶキーワード

私たちが考える、都市住民と農とのかかわり方を示すキーワードです。**楽しみや達成感が優先される仕事**。体を動かす共同作業による**“共給共足”**。コストや規模の追求ではなく、**伝統や文化**とかがわる仕事。

「遊び仕事」は、手作業がいっぱいです。作物を作る、道具を使う、料理をする、手入れをする、壊れたものを直す、景観を整える等々…**生活のための知恵と技術**がたくさん詰まっています。

「遊び仕事」は、誰にも居場所を作ります。生きる知恵と技術を持った先輩たち、それを実践する若者や親世代たち。その傍らで自然と触れ合いながら遊ぶ子どもたちと、それを見守るおじいちゃんおばあちゃん。年齢や障がいの有無さえも関係なく**みんなの交流の場**になります

「遊び仕事」の舞台は里山にあります。いのちあふれる里山は、**新たな憩いや癒しの場**となります。

「遊び仕事」は**持続可能な社会に何が必要なのか**をみんなで考えるきっかけになります。効率や弱肉強食の世界とは一線を画し、**多様性と共存の大切さやお金で買う以外の解決方法**など新しい幸せのカタチに気づかせてくれます。

遊び仕事は「農」の営みの中にあります。

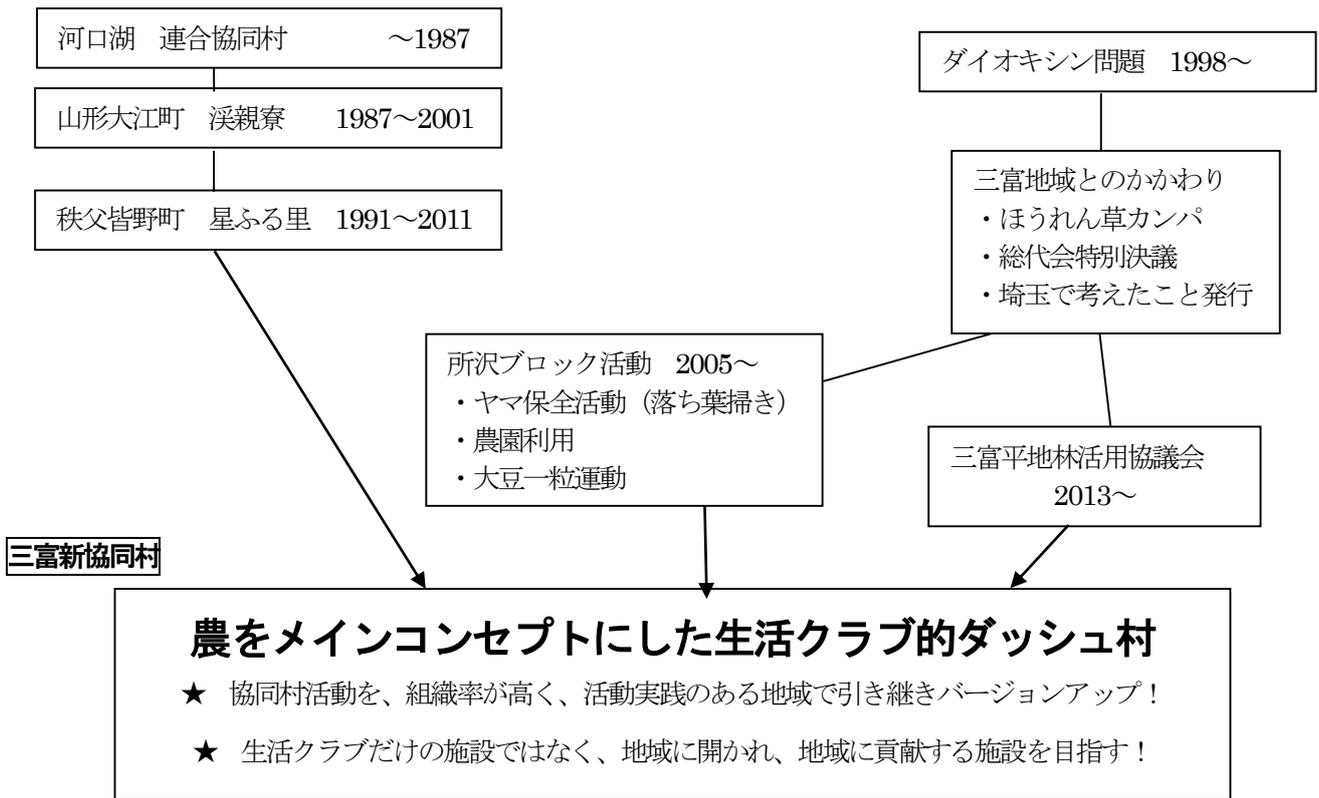
伝統的循環型農業が続く**三富**の地に、遊び仕事の拠点、人が交流する拠点、**未来を作る拠点となる私たちの協同村**を作ります

協同村では多様な形で「農」に関わる多くの人々が登場します。それぞれに合った「農」とのつきあい方と平行し「生産そのものに参加する消費者」を実現するために農業者と地域市民と共に農業法人を設立します。生産販売を行うと共に協同村で人々が生き生きできるよう日常的な管理運営を担います。

私たちの取り組みが、単なるイベントではなく「私たちの食糧生産のための農業」を展望するモデルづくりを目指します。持続可能な環境と社会を次世代へ引き渡していくことが生活者である私たちに求められています。「農」をコンセプトに、持続可能な社会と環境を作る。それが私たちの目指す新しい協同村の姿です。

2、三富 新協同村 全体構想図

経過



継続コンセプト：時間と空間を自由に表現する場、教育研修の場、子育て支援の実践の場

新コンセプト：**遊び仕事** (都市近郊農業の多面的価値農、持続可能な環境と社会、生きる力)

工程イメージ

第一段階： 協同村運営委員会の設置

- ・横山農園 (三富活動協力農家) での体験農園活動全体化
- ・大豆一粒運動継続、加工用トマト栽培
- ・里地里山保全活動
- ・コンセプトに沿うイベント

組合員+横山農園

第二段階： 農業法人を設立

- ・農業法人設立準備会を立ち上げ、事業計画を策定する。
- ・生活クラブだけでなく、地域市民、農業者を加えて農業法人を設立
- ・農地取得 (借用)、農業関連施設の建設
- ・常駐者の設置
- ・生活クラブだけの施設ではなく、地域に開かれ、地域に貢献する施設を目指します。

組合員+横山農園+地域住民+周辺農家+有識者

第三段階： 協同村建設

- ・宿泊研修施設等の農業関連以外の必要な施設
- ・生活クラブの協同村ではなく、地域の協同村を生活クラブが出資する農業法人が建設する
- ・生活クラブから農業法人への融資など資金計画の提案

農業法人

3 協同村の歴史

- 時間と空間を自由に表現する場＝「協同村」として 1979 年に単協合同で「河口湖協同村」が設置されました。長期計画をつくり取組みましたが、8 年後の 1987 年に常設施設から撤退し、その活動を各単協が引き継ぐことになりました。
- 埼玉単協では、1985 年夏の「子供キャンプ」が起点になり、86 年の「協同村 PJ 第 1 次答申」を受けて、**りんごの提携生産者**のいる山形県大江町の地元施設（雪深い冬の季節に地元の小学生たちが合同生活をしてきた寄宿舎）の無償譲渡を受け生活クラブ埼玉の協同村「**溪親寮**」としてスタートしました。
- 組合員の主体形成のため「**協同村運営委員会**」を設置し、旧大江町農協だけでなく、地元沢口地区の住民による協力団体「**溪親会**」の協力を得て、消費材である“りんご”の育成に合わせたイベント（りんご花見ツアー、りんご収穫ツアー等）、子供を対象にしたイベント（子供キャンプ、山里体験ツアー、風の子ツアー）、施設管理のためのリフォームツアーなどに取り組みました。
また、子供向けイベントは、若手職員のリーダーシップ養成研修の位置づけとしても活用されてきました。その後、新協同村「**星ふる里**」との並行利用などによる利用減少から 1998 年には地元住民団体へ再譲渡により返還しました。
- 1991 年には「協同村 PJ 第 2 次答申」を受け、埼玉県皆野町に新協同村「**星ふる里**」（1991-2011）を開設。「協同村運営委員会」により「自ら考え、協同して行動する」ことを基本に、単なる消費にとどまらない「交流や創造に喜びを感じる余暇活動」を目指し、様々なイベント、畑の活用、情報発信を続けてきました。また、宿泊ができる施設として、支部委員研修の会場としても積極的に活用されていました。
さらに、**子どもキャンプ**は、高校生・大学生になったキャンプ参加者がリーダーチームを形成し、キャンプの企画・運営を務めるなど「子育て支援・青年育成」の視点を持って継続されました。
- しかし、遠距離に位置すること、地元との関係の変化、担い手の固定化、利用減少、常駐管理者不在による整備不良、施設の老朽化、水が使えなくなる等の問題があり、**2011 年に閉鎖**しています。協同村近くのエッコロの森の植林を埼玉県農林公社との提携で行ってきましたが、時期を同じくして終了しています。
- 協同村の再建については**拠点政策**の中で提起され、40 周年記念事業として検討することとされました。
- 2014 年 4 月、協同村の再建計画案を策定するため、40 周年記念事業「生活クラブ的“ダッシュ村” 建設計画策定 P J」を設置しました。担当理事と公募による組合員の他、アドバイザーとして鬼頭秀一氏（元東京大学教授）、横山進氏・横山優子氏（横山農園）にも参加していただき、議論を重ねてきました。

生活クラブ生協 理事会

40 周年記念事業 協同村建設

未来へ続く夢を子どもたちへ！

『生活クラブ的“**ダッシュ村**”』建設計画策定プロジェクト』

◆プロジェクトメンバー募集！◆

農をメインコンセプトにした『生活クラブ的ダッシュ村（仮称）』三善新田（下記参照）での設置に向けてスタートします。
色んなことに取り組んでいくことで、様々な思いが加わっていき、色々な人があつまり笑顔が増える、競争ではなく共益の社会づくり

♪♪♪～こんなこともできる～♪♪♪

体験型農業、本格的農業、三善の保全活動、雇用創出、多様な収穫（農・畜・水産）
農業レストラン、地域の憩いの場、生涯学習、農業加工品製造、地域循環型社会づくり
防災拠点、自然エネルギーの活用実験、伝統の技術伝承（染の物、炭づくり、陶器型農業 etc）
などなどカタチにしたいことを山ほどです。一緒に考え実現しましょう

『農山漁水主権的ダッシュ村』マネージャーでない価値を身近にも一つ一つ作っておい！
生活クラブ的ダッシュ村の笑顔が全国・世界に広がれば最高の未来へ！！

応募内容

メンバー	担当理事と公募組合員 ※アドバイザーとして東京大学教授の鬼頭秀一氏と横山農園の横山優子氏が参加します。
活動内容	生活クラブ的“ダッシュ村”をどのようにしたいか、お任せと検討し建設計画を決定します。
活動期間	2014 年 4 月～8 月 ※月に各申元策定し 8 月理事会へ提案
募集期間	2014 年 3 月 3 日（月）～3 月 21 日（金） 別紙の申込書で申し込んでください。

第 1 回生活クラブ的“ダッシュ村”建設計画策定プロジェクト外会議

日時：4 月 3 日（木）10:30～12:30
会場：中瀬和本部 2 階会議室
※中瀬和本部から徒歩 3 分
*参加費：理事会事務局 049-839-4881

※ダッシュ村とは
従来の農業体験施設、動物の観察などに加え、昔ながらの自然体験型宿泊を併せていく日本らしい P J 体験 B&B の 1 コアです。

設置新田

現在の埼玉農研所内、三善町、川越市に広がる、農と農地、平地形が一帯となった地域で、環境保全型農業による野菜などが生産されています。稲作は防風や防人の役割を担い、野菜などの生産する面積を確保された耕地の残存に備える稲作、稲作の役割を担うほか、米収穫時に、残った稲穂に活用されています。



4 三富地域で行う意味

① 三富地域について

三富地域は、新田開発以来、屋敷地と農地、平地林が一体となった地割が維持されており、開拓時の面影を現在まで伝えてきました。

平地林の落ち葉を堆肥として畑にすき込んでいくことで、地力を増強し、保持し、この地域に適合させた独自の循環型農業が営まれ、ホウレンソウ、サトイモ、カブ、ニンジン、ダイコン、ゴボウ、チンゲンサイなどの他、サツマイモ、ウドなどの地域特産物の生産も盛んです。

この地域では、化学肥料や安価な有機質肥料が容易に入手できる今日にあっても、約6割の農家は平地林の落ち葉を堆肥として利用しています。そして、減農薬・減化学肥料栽培農産物の生産は、県内他産地に比べ群を抜いています。

こうした三富地域の農業ですが、ここ40年ほどのいわば短期間で、急激な変化をしてきました。つまり、昭和30年代から始まる石油、ガス、電気などのいわゆるエネルギー革命と高度経済成長の大きなうねりのなかで、平地林は、薪炭林としての意義を急速に失っていきました。

また、都市化に伴う様々な土地需要や多額の相続税負担を契機とした土地売却などから平地林の減少が進み、廃棄物焼却施設や資材置き場などに見られるような土地利用の混乱や地域環境の喪失を引き起こしています。

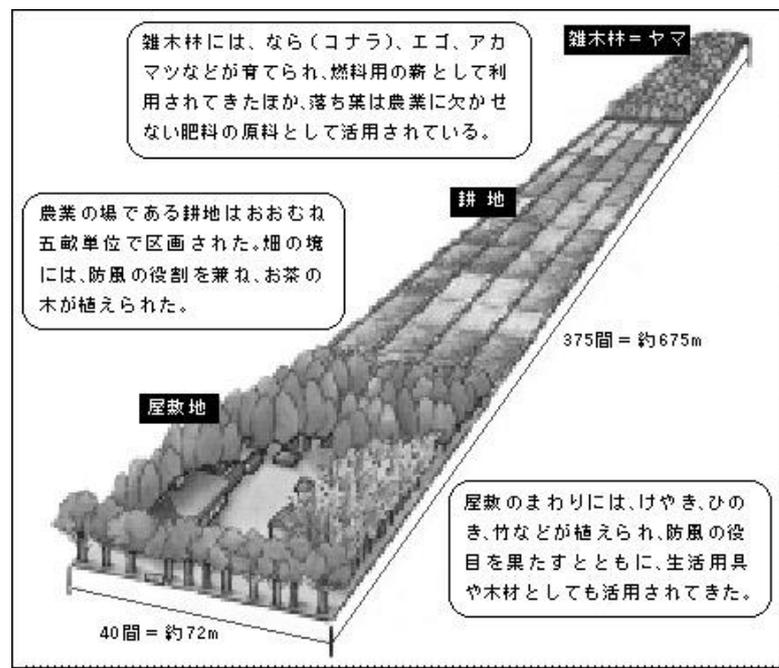
こうして、平地林とともにあったこの地域は、かつてなかった大きな変貌を遂げ、平地林を活用した伝統的な農業を継続し、それによる平地林のある豊かな農村環境を、農家の人たちの努力だけで守っていくことは、容易ではなくなっています。（「さんとめねっと」HPより抜粋 「さんとめねっと」とは、三富地域を次世代に伝えていくことを目的とするネットワーク。埼玉県、所沢市、狭山市、川越市、三芳町、JAいるまの、市民から構成）

② 生活クラブ埼玉とのかかわりについて

1998年ニュースステーションの報道に端を発した**ダイオキシン汚染問題**以降取組みが始まりました。ダイオキシン汚染所沢問題をうけ**1999年度総代会特別決議**「私たちは地域で安心して暮らしていけること、食料自給を進めるため、全国で農業が継続できることを求めて、おおぜいの力を合わせます」を決議しています。

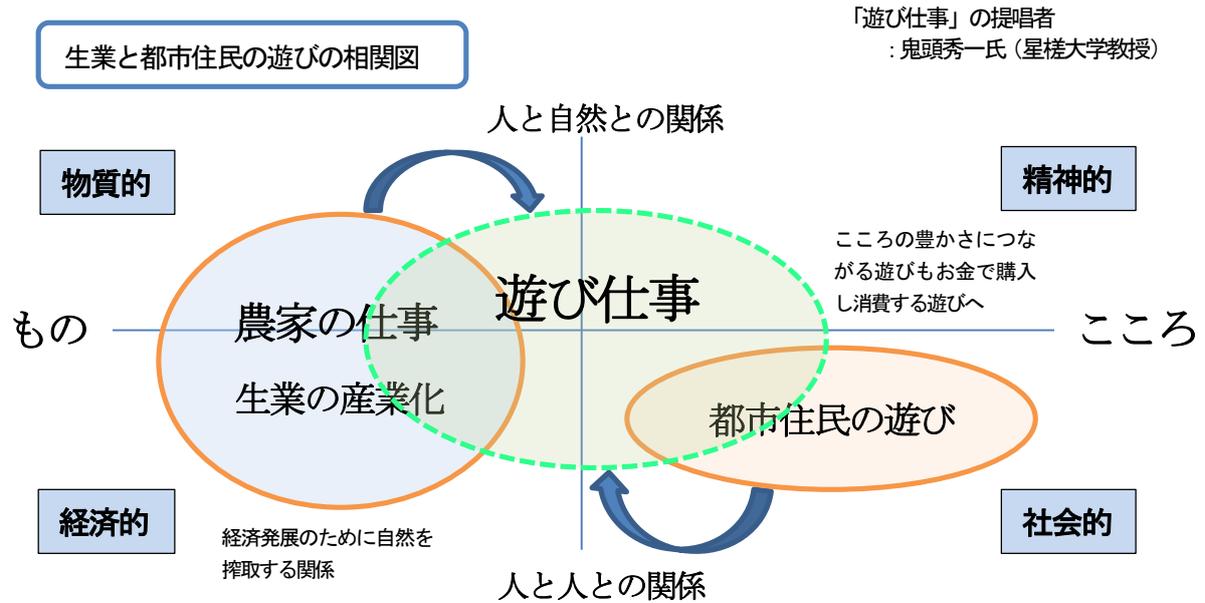
同年「**埼玉で考えたこと**」34万部を発行し、臨時支部委員会「生活クラブって、安全？」、統一班会議、首都近郊農業の保全のための請願を県・国へ提出しました。以降、**所沢ブロックの組合員活動**として継続的なかかわりを続けています。埼玉県設置の委員会「みどりの三富地域づくりや懇話会」「くぬぎ山自然再生計画検討委員会」に参加し、現在では2010年から始まった「農」と里山シンポジウムへの実行委員会参加、落ち葉はき等のイベントの開催、大豆一粒運動などを行っています。

2013年には、地元農業者、行政（川越農林振興センター、市町村）、江戸農法の会、NPO法人・木の家だいすきの会、JA、市民有志とともに**三富平地林活用協議会**を立ち上げ、国交省の助成を受けて循環型農業にとって不可欠な平地林を保全していく課題を薪の利活用で解決していく調査活動を行いました。2014年も2年連続で国交省の委託を受けて調査活動を継続しています。



三富新田イメージ図：三芳町民俗資料館HPから（一部改変）

5 「遊び仕事」=農業と遊びを結ぶキーワード



農の営みには、生産と生活と環境がワンセットで存在します。農家は「百姓」と言われ、多様な能力がなければできない仕事と言われてきました。農業とは、人間として生まれ持ってきたあらゆる能力を十分に発揮し自然と共生する仕事です。

規模と機械化で経済性を追求する生産、代々引き継ぐ家業、労働力の提供、自然やいのちに触れる癒しの場、体験や学びの機会など農の営みは多様です。

農家の仕事と、都市住民の暮らしや遊びとの接点もなくなってしまいました。「仕事」は、経済性（儲かること）が優先され、「遊び」は、商品として購入する時間消費型都市生活の中で自然との距離も遠のいています。生業と遊びを極端に分けるのではなく、接点となる部分を作り出すのが「遊び仕事」です。

農業はもっと精神的・社会的な営みを取り戻す。都市住民は、生業としての農業を理解する。それぞれが幅を広げて、分断された領域の接点を見つけていく事ができないでしょうか。

「遊び仕事」とは、私たちが考える都市住民と農とのかかわり方を示すキーワードです。経済的には「頼りにならず」、成果や収穫は「あてにはならず」、作業としては「けっこうきつい」・・・が、いったんその楽しさにはまると「なかなかやめられない」、それが遊び仕事です。

「遊び仕事」は、手作業がいっぱいです。作物を作る、道具を使う、料理をする、手入れをする、壊れたものを直す、景観を整える等々…生活のためには、知恵と技術が必要です。

「遊び仕事」は、誰にも居場所を作ります。大人たちは、生きる知恵と技術を伝える。若者たちは、それを学び競争とハードワークで失った何かを取り戻す。子どもたちは、楽しそうに働く大人の姿を見ながら自然の中で遊ぶ。

「遊び仕事」を囲む人と環境の中にいることで、いのちに触れる機会を作ります。大人も子どもも自然の中で、たくさんの「生きる知恵」を学ぶことができます。年齢も障がいの有無も関係なく交流し、学びあえば、お金の頼らなくても手に入るものが沢山あることに気が付きます。

「遊び仕事」は、効率のために環境を壊すのではなく、強いものだけが生き残るのでもなく、多様性と共存が大事なこと、お金で買うだけが解決の方法ではないことなど、持続可能な社会に何が 필요한のか気づかせてくれます。

「遊び仕事」の舞台は里山にあります。遊び仕事は「農」の営みの中にあります。伝統的循環型農業が続く三富^{さんとめ}の地に、遊び仕事の拠点、人が交流する拠点、未来を作る拠点となる私たちの協同村を作ります。

6 協同村で、こんなことしてみたい！

◆どんな世代も楽しみを見つけられる場をつくる

⇒森の幼稚園、自然体験+遊び。

- ・若者が参加しやすい。
- ・援農ネットワーク
- ・おじいちゃん、おばあちゃんの登場。自然の中で遊んだ経験が豊富な世代が、見守り&遊びの伝承者として登場する。
- ・大人も遊べ、癒される。
- ・誰もが一緒にいられる。



◆食農文化、生活技術、知識知恵を得られる場をつくる

⇒農作業、もの作り、食事作り、エコハウス作り

- ・衣食住、ゼロから作る。なんでも実感できる。生きる力を得られる。自由な発想ができる。特に子供たちに体験させたい
⇒例 木、草染め、わらや泥で小屋を建てる。みんなで作る。
- ・食べ物は自分たちで作る。旬を食べる。採れたてを食べる。
- ・ピザ窯、エコストーブでの調理
- ・オープンテラスでの食事
- ・平地林（ヤマ）を通して年間楽しめる。身近なもので楽しみながら生活技術を学ぶ（灰や火の活用）
- ・環境保全や防災など里山の持つ多面的な価値を学ぶ調査活動や学習会。



◆癒される場をつくる

⇒自然がある、ゆっくりできる、季節感を感じる

- ・絵本や図鑑の植物などの知識が、実際に実物で観察できる
→知識を体験でつなぐ場
- ・ハンモックカフェ
- ・不用品交換のできる場
- ・エコの見本市（モデル展示場）自然エネルギー（太陽熱温水器や風力発電など）の見本



◆新たな農業従事者をつくる

- ・遊びから遊び仕事へ都市住民がかかわることで、農業を生業（なりわい）にする人が登場。
- ・育成のための研修や空間が農業生産法人によって用意されている。

「農」を中心に活力あるまちづくり



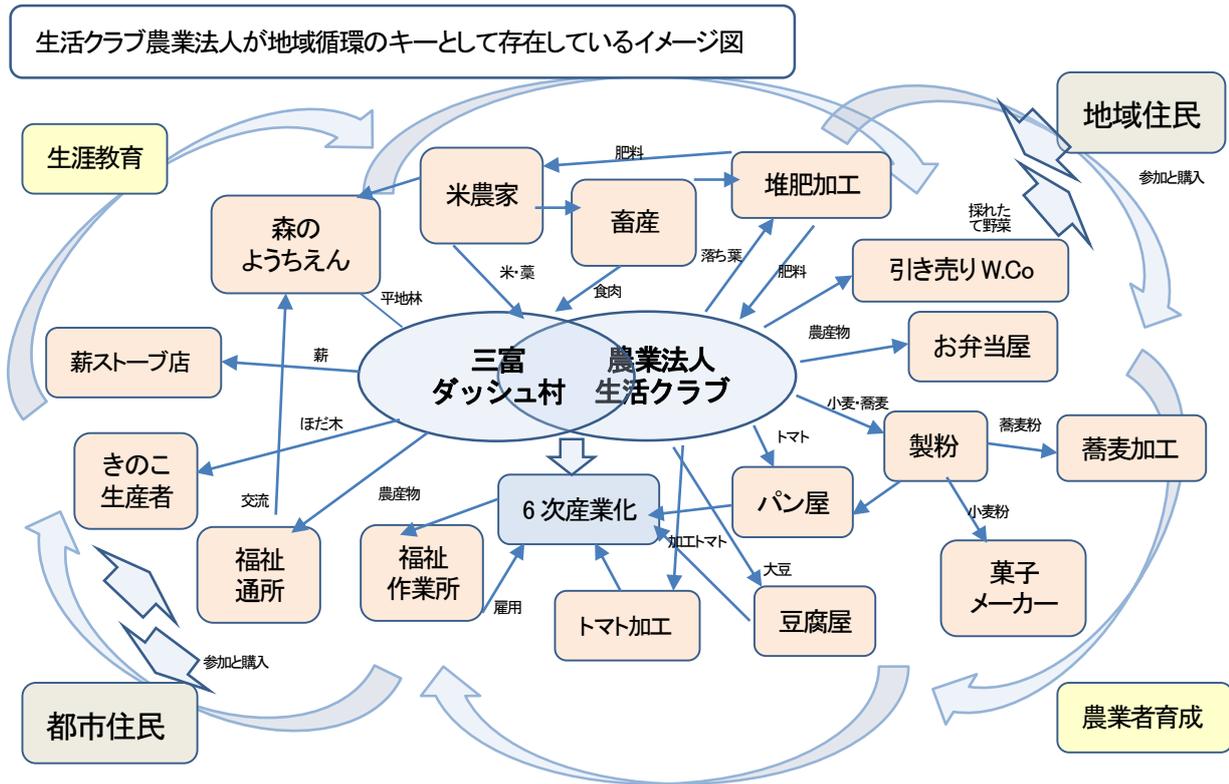
拠点（協同村）に多くの人々が登場し
活力あるまちづくりを行う！

7、「生産する消費者」像のバージョンアップ！ = 農業法人設立にむけて

わかって食べる、計画的に消費する、生産原価を保障する……それを「生産する消費者」と表現してきました。私たちは、さらにもう一步踏み込みたい、と考えました。生産そのものに参加する消費者像です。

分断された農業と都市生活。農業はもっと精神的・社会的な営みを取り戻す。都市住民は、生業としての農業を理解する。都市生活者が本格的な農業にチャレンジしてみることで、それぞれが幅を広げて、分断された領域の接点を見つけていく。まずは、遊び仕事から。徐々に生産へ。その行為をやりやすくする仕掛けが、地元農家、地域の市民と生活クラブが一緒につくる農業法人です。

農業法人を立ち上げ、農を中心にしたまちづくりを実践し、多くの参加によって「農」が継続できる仕組みを構築する。消費だけではなく生産活動も行う。ケチャップの原料となる加工用トマト、お豆腐の原料となる大豆、蕎麦や小麦を作るなど消費材の原料を自ら作る。いずれは加工工場を建設し自ら加工まで手がける。福祉作業所と連携し、障がい者も生き生き働くことが出来る場を作る。収穫した野菜はお弁当屋に卸したり、引き売り W.Co が地域住民に販売する。平地林で伐採した木は都市住民の燃料になる。米農家や畜産との連携も進め堆肥を開発する。そのような地域内循環が進めるべく構想の中「生活クラブ」が生産者として位置づけられるように農業法人を設立することで、協同村活動の延長線上に、そのイメージを作り上げていきます。



農の福祉力が注目されています。癒しやレクリエーションの場としてだけでなく、健康づくりや治療の場として機能が認められつつあります。精神的な障害からの回復を図るグリーンケアの場としてなど農福連携の活動が広がっています。

農の仕事力も注目されています。6次産業化や技能訓練（あてになる援農ができる人材育成）だけでなく、本格的な雇用に備える前の中間就労の場や障がい者の雇用の場（福祉的就労事業）としてなど。農の営みの幅の広さが多様な人材を受け入れるからです。

農業法人としての法人格を生かした取り組みにチャレンジしていきます。

8 農業法人 事業計画 (法人設立準備会を設置し、具体化を検討していきます)

生協では農地の借用や購入及び市街化調整区域に建物を建てられない制限があります。農家ではないからです。それならば生活クラブが農家になればいい。すなわち、生産する消費者像をバージョンアップする手段として、農業法人を設立します。

農家の高齢化（平均年齢は66歳）、後継者不足、休耕地の増大、食料の安全保障など農を取巻く問題は急を要する状況です。生活クラブは新たな農業モデルとして生協、農家、地域住民、有識者で農業参入を行い自ら生産する体制を構築します。農を中心にしたまちづくりモデルを全国に発信していきます。

①農業法人 事業目的

- 1) 農産物の生産と販売
- 2) 都市住民との交流の場づくり
- 3) 働く場の創出による社会貢献

②事業内容

- 1) 資源循環型農業及び生物多様性保全型農業による農作物の生産、関連団体による加工、販売事業
- 2) 都市住民、職員、障がい団体、関連団体等による農業体験、交流事業[農業環境サービス事業]
- 3) 新規農業者の研修及び就農事業[農の雇用事業]
- 4) 上記に関連する調査・研究等
- 5) 協同村の維持、管理、運営を担います。ボランティアとともに、常駐者が日々の手入れや作業を行います。

③事業スキーム (案)

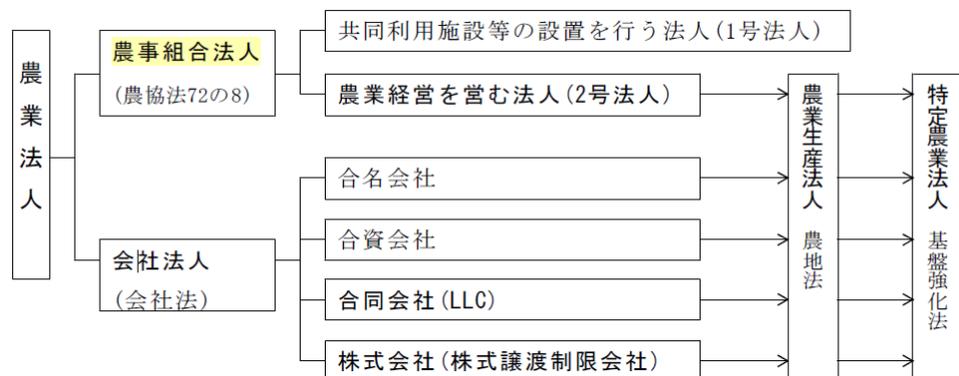
*農業生産単独で事業継続が可能となるレベルを年間2,000万円以上と推定し、5年後に到達する規模として事業計画を設定。

・農産物を生産・販売し継続した事業をめざし、その期間を支援事業、農の雇用事業、新規就農者確保事業（青年就農給付金事業）、規模と生産体制を整える。

④法人形態・要件

- 1) 法人形態：農事組合法人（調査活動の中で検討していく）
 - ・農業法人の実態を検証しつつ、種子と農法、農業と生き物と環境の視点を盛り込み、共同の理念が生きている運営形態の農業組合法人を選択します。農地を所有できる法人、借りることもできる法人です。
- 2) 事業要件：主たる事業が農業（農産物の加工・販売等の関連事業を含む）、協同村管理運営、研修受入れ
- 3) 構成員要件：生活クラブ生協・横山農園、近隣生産者、地域住民、有識者（鬼頭先生を想定）

【農業法人の分類】



○農事組合法人（組合の形態をとるもの）

農業協同組合法により規定される法人で、農業経営等を法人化するため、農業独特のものとして設けられたもので、「組合員の共同利益の増進」を目的とする、いわば協同組織的性格を有しています。

なお、農事組合法人は、農業に係る共同利用施設の設置を行う法人(1号法人)と農業の経営を営む法人(2号法人)の分けることができます。

9 スケジュール（構想の進め方）

第一段階： 公募による協同村運営委員会（仮称）の設置（2015年1月）

- ・横山農園（三富活動協力農家）での体験農園活動全体化
- ・加工用トマト栽培
- ・里地里山保全活動
- ・コンセプトに沿うイベント

組合員+横山農園

第二段階： 農業法人を設立

組合員+横山農園+地域住民+周辺農家+有識者

- ・三富平地林活用協議会メンバーを中心に農業法人設立準備会を立ち上げ、事業計画の策定、各種手続き等を行う。（生活クラブ側は政策調整企画担当案件とする）
- ・生活クラブだけでなく、地域市民、農業者を加えて農業法人を設立
- ・農地取得（借用）、農業関連施設の建設
- ・常駐者の設置
- ・生活クラブだけの施設ではなく、地域に開かれ、地域に貢献する施設を目指します。

第三段階： 施設建設

農業法人

- ・宿泊研修施設等の農業関連以外の必要な施設
- ・生活クラブの協同村ではなく、地域の協同村を生活クラブが出資する農業法人が建設する
- ・生活クラブから農業法人への融資など資金計画の提案

第四段階： 雇用の創出・教育事業化

農業法人

- ・6次産業化
- ・障がい者雇用（だれもが生き生きと働くことが出来る場づくり）
- ・技能訓練、農業者育成
- ・森のようちえん
- ・生涯学習

第五段階： 地域内の信頼を得る

農業法人

- ・共感者が増え三富全域の遊休地管理と使用を委託されている。

	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度以降
理事会		9月答申の確認 協同村運営委員会設置 名称募集 建設以外の判断		協同村運営への関与
総代会			建設予算の決定 農業法人出資提案	
生活クラブ的 ダッシュ村建設 計画策定PJ		4月討議開始 ↓ 9月答申作成		
所沢ブロック		全体動向と調整判断 所沢ブロック活動として 継続(大豆)		
横山農園		協同村構想への協 力可否判断 加工用トマト実験	農業法人へ参加	
三富平地林保全 活用協議会	設立 生活クラブ参加 国交省委託事業受託 料1,000万円	2年目 国交省委託事業受託 730万円 加工用トマト実験		
農業法人 (生産へ参入)		設立準備・調査	設立総会 加工用トマト栽培 大豆栽培	地域自給率アップ、 食農教育活動 農業者育成
協同村			農業法人として用地取 得、建設検討	建設 開村 農事法人が管理運営

10 おわりに

持続可能な「農」を求めて

生活クラブ的“ダッシュ村”を作ろう！という呼びかけに集まったプロジェクトメンバーから様々なアイデアや思い、夢が語られました。

三富は今から320年前、増加し続ける江戸の人々のために食料基地として政策的に作られた開発地域です。林や森を伐採して畑を開墾したわけではなく、水の得にくい荒涼とした大地に木を植え、屋敷林や雑木林をつくり開拓されました。

地球規模での砂漠化や飢餓が問題になっている中、南米のチリで三富を手本として、耕地を扶むように木を植えるという技術を取り入れた結果、実際に砂漠化が食い止められ緑地が復活した事例があります。雑木林は燃料である薪や落ち葉堆肥の供給源として、屋敷林は防風林、地震対策、生活用具、緊急時の食用として樹木の特性を生かした植林がされ、価値あるものとして活用されていました。

林業の山林は用材になる杉やヒノキが中心であるのに対して、農業のための林（平地林）は薪炭にしかならない雑木ですが、一歩足を踏み入れた時に感じられる平地林ならではの里山の景観が広がる場所でもあります。

現在は生活が一変し燃料としての価値は失われていても、雑木林や自然環境が私たちに与えるくれるものはたくさんあり、こんなこともできるというアイデアがたくさん出されました。そこには「人」が様々な場所で登場し、人と人がつながる場づくりがキーワードになります。

高齢化や労働力不足が指摘されて久しい農業の現場に対して、農家の努力による農地保全から地域住民の緩やかな参加による農地や林の保全へ。一人ひとりが自分に合った「農」とのつきあい方を見つけ、農業理解を進めていくことが持続可能な「農」の一步につながるでしょう。

三富で築いてきた先人たちの知恵を次世代へつなげていくため、生活クラブの掲げる「生産する消費者」を文字通り「生産そのものに参加する消費者」へ発展させ、持続可能な「農」に向けて生活クラブが時代の先駆者として未来に向けてチャレンジすることで新たな物語を紡いでいきましょう。

320年続く農業を未来へつなぐ



**三富での実践が
全国・世界へ広がり
希望ある未来へ！**